

James E. Côté, Professor

ジェームズ・E・コテ先生 (カナダ・オンタリオ大学・社会学部・教授)

(<http://sociology.uwo.ca/people/profiles/Cote.html>)

- Identity: An International Journal of Theory and Research 誌の創設者・編集者
- the Society for Research on Identity Formation (=SRIF; 現・ISRI) や, the International Sociological Association's Research Committee on the Sociology of Youth の元会長。



<専門領域> identity studies, youth studies, higher education studies.

<最近の著書>

(2016) Identity Formation, Youth, and Development: A Simplified Approach

The concept of identity is one of the most important ideas the social sciences have investigated in recent years, yet no introductory textbooks are available to those who want to gain a sense of this burgeoning field. The first of its kind, this text provides an introduction to the scientific study of identity formation, with a focus on youth development. The analyses of the problems and prospects faced by contemporary young people in forming identities are placed in the context of societies that themselves are in transition, further complicating identity formation and the interrelated processes of self development and moral-ethical reasoning.

(2015) Youth Studies: Fundamental Issues and Debates

Youth studies draws on a wide variety of ideas and debates, which can often present a confusing picture to uninitiated students. This book introduces essential concepts and then applies them to key areas of the field, so that readers can make sense of the fundamentals. It provides a comprehensive view of the landscape of youth studies today.

<最近の講演>

2016/3/30

Keynote address "The Future of Identity Studies as an Interdisciplinary Pursuit" at the ISRI 2016 Conference, Baltimore

This brief presentation provides an overview of Identity Studies as a nascent interdisciplinary field. Highlights from two recent books—one written primarily for psychologists and the other primarily for sociologists—are presented that identify key divisions in the field that prevent identity researchers from different paradigms engaging in truly interdisciplinary, collaborative projects. Understanding the nature of these divisions is argued to be key to moving the field forward, and creating a paradigm amalgamation in which the International Society for Research on Identity can play a key role.

2016/2/23

Feb 23 gave public lecture "The Identity Capital Model: Validation, Findings, and Applications" at the Department of Social Work, The Chinese University of Hong Kong.

The Identity Capital Model proposes that forms of personal agency are associated with identity development as part of the transition to adulthood. In this presentation, the theoretical basis of the model is discussed as it applies to the "identity markets" of late-modern societies. This discussion is followed by a summary of the quantitative and qualitative empirical findings to date in support of the operationalization of key concepts, and the applications of the model to education-to-work transitions and various important developmental outcomes. Evidence is also presented of the cross-cultural validity of the Identity Capital Model and the cultural invariance of its operationalizations.

<検討によく用いる尺度>

MAPS20 (The Multi-Measure Agentic Personality Scale)

- ・アイデンティティ形成を支える資本のうち、個人のパーソナリティ要因として想定されたもの。アイデンティティ形成に寄与するとされる様々なパーソナリティ要因を測定し、その影響力の大きいところから、最終的に4つのパーソナリティ要素を帰納的に導いた。
- 4つのパーソナリティ要素とは、以下の通り。MAPS20は、各5項目の下位尺度からなる。
 - ・ **Self-Esteem**
 - ・ 私は一緒にいるととてもおもしろい人間だ。
 - ・ **Purpose in Life**
 - ・ 私にとって人生は、常に刺激的なものに見える～同じことの繰り返しのように見える
 - ・ **Locus of Control**
 - ・ 成功するためには一生懸命頑張らなければならない。運で道が切り開けるなんてあったとしても希（まれ）なことだと思う。
 - ・ **Ego Strength**
 - ・ 私は難しくても挑戦的な状況を楽しめる

ISRI Identity

- ・ アイデンティティ課題を達成したと感じているかどうかをとらえるもの。次の2側面各3項目。
 - ・ **Adult Identity Resolution Scale**
 - ・ 自分のことを大人だと思う。
 - ・ **Societal Identity Resolution Scale**
 - ・ 他人から大人だと見なされていると感じる。

Identity Horizons Scales Items

- ・ 所与の状況（親や地域）に縛られず、自らの人生を構築しようとしているか否か。
 - ・ 職業を選ぶ際に、所与の状況に縛られず、自由に考えているか
 - ・ ほんとうにやりたい夢や目標の仕事のためなら、私は人生を軌道修正することをためらわない
 - ・ 教育によって、未来を拓けると考えているか
 - ・ 自分の夢や目標を実現するために、学校でしっかり勉強する必要がある
 - ・ 選択に不安を感じているか
 - ・ これ以上の教育（大学院など）を求めると、親は反対と思う

III (Identity Issues Inventory)

- ・ アイデンティティに関する事項について、多面的に測定する尺度
 - ・ 自分自身
 - ・ 私は人生に必要な技能や能力をしっかりと持っている
 - ・ 行動、経験
 - ・ 私はたいてい、本当の自分をわかってもらえるような服を着たり行動したりしている
 - ・ 他者との関係性
 - ・ 人は私のことを、必要なことは自分でしっかりできる大人だと見ているだろう

Côté, J. E. (2014) The dangerous myth of emerging adulthood: An evidence-based critique of a flawed developmental theory. *Applied Developmental Science*, 18, 177-188.

Emerging Adulthood（成人形成期）という危険なウソ：根拠を持って欠陥発達理論を批判する！

報告者：兵庫教育大学 中間玲子

【この論文のポイント】

- ・目的：Emerging Adulthood（以下、EA と略記）理論が実質のないものであることを示していくこと。
- ・EA 理論とは、青年期と成人期との間に、新たな発達段階を想定する考え方である。
 - ・これが支持されるには、社会状況によらずその年齢になると共通して何らかの経験がなされるということ、加えて、その経験が発達過程として説明されることが必要となる。
- ・だが、それを支持する根拠はほとんど見当たらない。
 - ・反例が存在する→「普遍的発達」という見解は崩れる。
- ・ところが発言力が大きく、政策担当者や公人に受け入れられてしまった。これは、若者の生活や人生の実際に向き合う際に弊害をもたらすものとなっている。
- ・どうか読者には、EA 概念がウソであるということを理解して欲しい。

■Emerging Adulthood 概念

- ・Arnett（2000）：「10代後半から20代にかけての者に関する発達理論」として提唱
 - ・その後、多くの引用、この概念を用いた多くの論文、さらには“Emerging Adulthood”誌の創刊も展開され、社会に対する影響力の大きな理論となっている。

- ・Côtéによる問題提起の観点：

- ①「新しい発達期の提案」という、そもそもの問題についてほとんど論議がなされていない
 - ・この問題について、15年のうちに、どのような根拠が得られたのか？検討する。
 - ②正しい方法論的手続きを経た上で提出された概念といえるのか？
 - ・概念提出の手続きは十分だったか、また、この概念でなければ「引き延ばされた青年期」を説明することができないのか
- これらを通して、すなわち、「神話」が作られたのだ、ということ、そして、その神話は、若者の人生・生活を、より困難なものにさせていることを主張する。

- ・EAにおける2つの用法

- ①Arnettが記述する「引き延ばされた青年期」を生きる若者を示す言葉
 - ②10代後半～20代の者を示す言葉
- これらが混同されており、10代後半～20代の者の本質が、EA的なものと誤解されていく。
- ・10代後半～20代というのは、大人になる上で背負うべきものが客観的に増える、すなわち、大人への移行が進む時期。その移行期を示すものとしてEAを用いることもあれば、Arnettがとらえる若者論にあてはまる者を表す概念としてEAが用いられることもある。

- ・本来とられるべき手続きを経ずに提出された概念である。

- ・まずは、従来の概念（後期青年期とか成人前期など）を用いながら、大人への移行が、この20-30年間で平均的に長期化されていることを示すこと
- ・その「平均」についてしっかり探究すること

→結論から言うと、ArnettのEA論は、精査に耐えるものではない。

- ・そしてその内容は彼の前提によってひどく歪められており、深刻な社会構造の障害や貧しい経済状況に直面しており、大人への移行に困難を感じている若者たちを害するようなものとなっている。
 - ・通常であれば、無視される理論だが、新聞記者の目にとまり、誤った情報が、若者の政策決定に関与する様な公的な、政治家たちに広がることとなっている。
- それゆえ、EA神話は危険であると、しかもそれは現代および後代の若者の幸福を損ねる概念であると、指摘したいのだ。

■Arnett 公式の方法論的、概念的基盤

・Arnett が用いた方法論は、18-29 歳の 300 人のアメリカ人に対するインタビュー (Arnett, 2004)
→EA を“区別された発達期”として主張する 5 つの主題/側面を抽出している。

- ・ 5 つの主題/側面
 - ①アイデンティティ探求
 - ②不安定性
 - ③自己焦点化
 - ④青年と大人の間にいるという感覚
 - ⑤将来の可能性に対する楽観的感覚

▼普遍性に対する疑問

- ・これは見方の一つ (メタナラティブ: 大きなあらすじ, 世界を動かしている公式) としては価値があるかもしれないが, それが見逃しているところもあると思わざるを得ない。
 - ・だが, この見解は, アメリカのあらゆる社会階層, 経済および教育環境にある 18-25 歳の者に関するものとされた。(文化普遍ではないと明記しながらも)
 - ・EA 期を十分に経験できるかどうか, その程度がそれらの要因によって異なるとした。
 - ・「全体的に豊かな国であっても, 社会経済的地位や生活環境は, どの程度若者が EA を経験できるのかを規定するものだ」「中流階級以上の者が経験できる EA を経験できない若者もいる」
 - ・Arnett & Tanner (2011b): EA は中産階級の若者に限らない, 様々な経済環境にある者を視野に入れた概念である
 - ∴高卒で結婚する場合であっても, 大人役割の獲得にはやはり 6 年は要する。
- 人口統計学的なことを普遍性の根拠とするのは, 発達の観点として首肯しかねる→早期成人期で十分

▼発達段階とすることへの疑問

- ・Hendry & Klope (2010): 発達段階として EA を位置づけるならば, この時期に発達する「何か」が指摘されねばならない。人間の発達とは, どの段階でも指摘される“変化”とは異なるものとして論じられなければならない。

▼議論すべき重要な観点が欠落している

- ・Schoon & Schulenberg (2013): EA は「引き延ばされた青年期」をよく表す概念であると言えるが, そこでは, それを生み出している社会経済的状况への考慮がない。その代わりに個人のコミットメントの延長についての自由選択を中心とした心理学モデルを打ち立てている。しかし, 移行の結果は, 個人の資源や能力だけでなく, 構造的な機会や制約といったところにも依存するものである。
- ・大人への移行過程を Arnett 論で理解することは若者に対する弊害にもなる。
 - ・社会的要因のためにモラトリアムを享受できていない若者がいる。その格差を拡大させる。

▼見落としてはならない事柄

- ・Arnett の理論は, 若者のある層については説明しうるものだろうが, なぜか普遍的なものと主張する。
- ∴Erikson が文化普遍的に青年期を identity 形成の時期として論じたから。
 - ・Erikson: 1950-60 年代にかけて青年を観察。24 歳までモラトリアムが続くこともあることを指摘。ただしそのモラトリアムの長期化は, 個人によって主体的に選択されたものであった。
- ・昨今のモラトリアムの長期化は 1980 年代からの経済の悪化の結果として, 意図せずに陥ってしまっている類のもの。つまりは, 不本意なモラトリアムの長期化。
 - ・労働力から排斥され, より employability を高めることを求めて高等教育に進学する者が増加。

■Arnett 公式に対して彼が根拠としているもの

・Arnett は, 「新たな普遍的な人生段階」を発見したと主張してやまない。

・だが, その根拠はずさん

・Arnett (2001): 社会階層の指標は父親の学歴のみ

・社会経済的地位をとらえるには弱い指標

・共変量として用いられ, 統制処理がなされただけで, それ自体の影響力の検討はなされていない。

→「社会階層にかかわらず, この年齢は, EA として設定された時期」という主張に値しない。

・ Arnett (2003) の問題 : Arnett (2001) とほぼ同様。
→ 「少数民族における EA 概念は、白人のものとはほぼ同じだ」と結論づけているが、そのような主張の根拠は一切見当たらない。

・ Arnett & Tanner (2011b) : IDEA (Identity Dimensions of Emerging Adulthood) の不変性検討。
→ 仮説で設定した因子構造は見出されなかった。
→ 社会階層は、[労働階級, 中産階級, 上流・中流あるいは上流階級] に分けられ、群間の不変性は見られなかった。
・ おそらく仮説で設定した因子構造は中流階級でのみ見られたのではないか? それ以後の検討なし。

▼ つまり

・ Arnett の論文や著作にも、他の研究者のものにおいても、Arnett の発達観を社会階層に関係なくすべての若者に適用できるのだと示すものは一切存在しないのである。
・ だが、この年齢層を新たな区別された発達の時期とする論が展開されている。
・ 一方で、単に年齢を示す後の類義語として論じられることもあるのが事実。

■ 長期化された大人への移行に関する他の公式

▼ Arnett 論を否定する研究の紹介

(1) 語りの研究

・ Hendry & Kloep (2010) : 17-20 歳, Wales の若者の語りを Arnett 公式にあてはまるか調査。高等教育を受けていない者に焦点。
→ 「Arnett の EA 段階があてはまったのは、インタビューの一群のみ」。他は、「prevented adult」「adult」
・ 多くの者が、職業や結婚含め、安定したアイデンティティを持っていた。また、自己より他者のことをより考えており (そういう状況にあり), 38 人中 25 人が自分を大人であると回答していた。また半数は将来に対する楽観はなく、機会がないところにはまりこんでいると諦めていた。

・ Silva (2012) : 学歴の低い父親をもつ 20-30 代の 93 人のアメリカ人を調査。
→ 労働階級における 4 つの語りを報告。アメリカ人の若者にとっての、強制的で長期化された大人への移行における「隠れた傷つき」を暴露した。
・ 伝統的語り : 大人に関する社会的指標の達成に焦点
・ 治療的語り : 心理的傷付きや自己成長に関する語り (60%)
・ 労働階級の者にとっては、自己探求や社会的指標の通過は、いずれも経済状況のためにもちえないものであり、大人への移行の主たるテーマにならない。その代わりに、宗教的治療的慣習における個人的指標を用いて語る。
・ 伝統 + 治療
・ 伝統 + 宗教 : 神の計画としての遅れた大人への移行
・ 「伝統的な大人指標が脆弱になった不明瞭な時代」という文脈で考察している。

・ Arnett の見解や語りの例は、多くの若者たちの一例にすぎないことを示している。
・ 経済的満足に関する状況的違いが、主観や反応の多様性を生み出す。

(2) 量的研究

・ Osgood ら (2005) : 24 歳の 1410 人のアメリカ人について、潜在クラス分析 → 5 つの大人指標をもとにした 6 クラスターを抽出。
→ 教育から職業への移行や大人の生活スタイル/家族の形成にはいくつかのトラックがあることを指摘
・ ファーストスターター (12%) ; キャリアなしの親 (10%) ; パートナーのいる学卒者 (19%) ; 独身の学卒者 (37%) ; 独身の有職者 (7%) ; スロースターター (14%)
→ 最初の 2 つは、大人への早いトラックを示すクラスター。裕福ではない背景をもつ。
→ スロースターターは、Arnett の EA に類似するがそれは、全対象の半数にすぎない。

- Schoon & Schlenberg (2013) : イギリス, アメリカ, フィンランドの若者を調査。5 クラスター抽出。
 - 高学歴 (10-20%) ; 子どものない職業指向の者 (33-46%) ; 伝統的家族トラック (22-40%) ; スロースターター (15-33%) ; 脆弱な移行 (5-12%)
 - 経済的に恵まれない場合, 移行は早まる傾向。教育の機会や期間を提供されないため。
 - ただしファーストスターターが生活満足度が低いわけではない。従事する職業にコミットできた場合, 有能観や達成感を体験する機会が得られることとなる。
- 大人への移行の長さをめぐる語りにはさまざまなものがあり, そしてそれらは新たな発達段階を求めたものではない。流動的な経済状況は多くの若者にとっては明らかに悪い影響を及ぼしている。
- これらから, Arnett の理論は, 「ゴムシート」みたいなものだといえる。
 - 限定的な概念構造を基盤にしながらも, それが仮定しているところよりもかなり引きのばされた範囲のところを説明しようとしているもの。

■欠如している根拠とは？

▼EA 概念以後

- その概念のもつ仮説の真偽が検討されることはほとんどなく, だが, EA という言葉が, 「青年期後期」や「大学生」にとって変わられることとなった。
- Arnett は, 自身の論に対する批判に対しては, たとえば「外れ値」として退けている。

▼とるべき手続きとは

- 「発達する」とされるものは何であるのか, 明らかに定義する必要がある。
 - 発達論よりも, 直面している困難な経済状況などによる説明の方が説得力があるように思われる。
 - 社会学を含む若者研究にとって, また, 発達心理学にとっても, Arnett 理論を受容するメリットは何らない。
 - 将来に対する楽観的な見方など, 語りの他の要素が, なぜ「発達の」なのかも問題となる。
 - Arnett は 20 代を楽観的であるとする。だが, 少なくとも楽観バイアスが優勢なアメリカにおいては, どの年代でも楽観性が見られるという指摘がある。
- 発達段階だとするならば, いつ始まり, いつ終わるのか? の議論も必要。
 - アイデンティティ探求が始まる, とするのも根拠としては弱い。
 - 大人への移行が停滞しているのは, 若者が主体的に選択したアイデンティティ探求などではなく, 不安定で, 曖昧で, 搾取的な職場環境への対処かもしれない。
 - 「青年期と EA との間で何が変わるのか?」 (Schwartz et al., 2013)
 - 青年たちはアイデンティティ課題に取り組んでいる。青年期のアイデンティティ課題と, EA でのアイデンティティ課題とで何が違うのだろうか?
- 研究の手続きとしては, Arnett の 5 つの語りが社会階層を問わず普遍だと示すところが欲しい。まずは因子不変性の検討が必要。
 - またその因子不変性が示された場合, その内容が「閾値効果 (threshold effects)」であることが示されなければならない。そしてその語りが閾値を示すものであるということ, 18 歳ごろに現れて, 25-30 歳くらいごろに終わるものであることが, より顕著に示されなければならない。そしてそれは, 他のいかなる理由でもなく, 人生の「段階」によるものであることが示されねばならない。

■危険な神話

- Arnett によると, EA は, しばしば大人への長い, 時には危険な移行過程にしばしば奮闘しながらも, 自分の成人期の生活については希望を持ち続けている。
 - だが, その世代の若者には別の特徴を示す者もある。Côté (2000) はそれを指摘した。
- Arnett 「EA の暗い側面については Côté (2000) を参照のこと。Côté の EA に対する描写はあまりに寂しい」
- 社会において不遇な経験をする者を, なぜ, 「暗い」とか「寂しい」と表現するのか?
 - ちなみに : 2005 年の共著において, 我々は, アメリカの大学生を対象として, 「個人化の不履行」を操作的にとらえて, その要因を検討した。その結果, アイデンティティ形成に対して, 50% が発達 (年齢) による, 残り 50% は他の不履行要因 (停滞や受け身など) によるものとされた。

- Tannock (2001) の指摘：若者の学校から社会への移行を取扱う多くの研究は、若者がいかなる労働市場に直面しているかを看過している。パスモデルにおいて、若者たちが実際に学校から社会へと移行する際にいかなる具体的な仕事を行うのかについてはほとんど看過されている。
 - 若者が行える多くの仕事にはひどい労働環境のものもあるのに、搾取の問題や、若者が従事できる仕事の性質をいかに改善すべきであるのかは学問的にはほとんど無視されている。
- Arnett モデルもしかし。若者は過酷な労働環境でまごついているのではなく、豊富な選択肢においてアイデンティティ探求をしていると理解する。
 - 「青年期の労働は遊ぶ金ほしさ。EA において、自らのアイデンティティを問う職探しをする」
- EA 概念が公人や政策担当者の耳に届き、それを正常な発達とする前提で政策が作られると棄権。
 - 1980 年代から政治経済における若者の地位低下は続いている。そのような社会状況が考慮されずに、若者のアイデンティティ探求のためとして大人への移行の長期化が論じられてしまう。
 - 政策担当者にとって（「学術的に支持されている」）EA 概念は、今の若者が直面している状況を発達の一様相として手つかずに置くよき弁明となる（Gaudet, 2007）を参照のこと。
- 実際、多くの国で、少数集団においてよく見受けられるのだが、豊かでない背景をもつ若者が「プレキャリアート」として記述されるようになっていく。
- また、彼ら自身、大人への移行はゆっくり時間をかけて先延ばされるべきと考えるようになっていく。

■結論

- とにかく読者には、引き延ばされた移行を EA の類義語としないことを望む。
- ある年齢層を記述する用語としては EA は悪くないと思うが、Arnett はそれを大人への移行における誰もが通る普遍的な道だと容赦なく売り込んできている。
- 彼は批判に応じる態度を見せながらも、理論を修正しようとしなない。EA を 2 つの意味で不安定に用いることもそのままである。
- 彼の理論は水を濁らせるのみならず、本稿で述べたように、若者達にとって危険な結果となるようなことを引き起こし兼ねない。
- Arnett 公式は眉唾である。だが、現在その用語を使っている多くの者は、その言葉の本質や発達の観点における限定的要素に気づかないままである。
- Arnett は Erikson や Marcia が、青年期にアイデンティティ探求がなされると述べたところに依拠しているわけだが、Erikson も Marcia も、全ての者がアイデンティティ探求活動をするとは言っていない。
- 確かに、引き延ばされた移行にはアイデンティティ形成の要素がある（職業アイデンティティなど）。だが、青年期のアイデンティティ形成とどう違うのか、などの説明はない。
- アメリカ限定の理論であるとは言え、アメリカでは全社会階層に適用可能だと述べる。→おかしい。
 - 過酷な非標準的な経済状況に直面している者や、伝統的な大人への移行を果たす者においても EA が見られるといえなければならない。
- 強調してきたように EA を発達段階だとするには、彼の論は論理的にも実証的にも誤謬がある。
- 全社会階層で支持されたとしても、それが発達段階の閾値ゆえと示されねばならない。
- EA を新たな発達段階であるとする Arnett 公式は神話である。そしてそれは危険な神話である。
 - 社会構造による現象を年齢段階的な課題とすり替えられ、むしろ、移行は遅くあるべきだと考えられるようになってしまっている。
- より深刻なのは、政策担当者達が、若者が労働市場から排斥されているという現状を「自然」で個人的な「選択」によると見なしていることである。
- そのために現在および将来にわたる世代に対する金銭的・情緒的必要性が無視されたり、あるいは、より広い社会にわたる損失につながる誤解になったりしている。

